

論理的文章の読解実践①

中笠肇「空間と人間」(二橋大)

時間
35分

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間の生涯を考えてみると、それはまず誕生に始まり、成長と成熟の過程を経て生殖を行い、そして老衰の後に死を迎える。個別的な例外は別として、こういう一般的な過程を見る限りにおいて、他の動物(どころか生物一般)の一生もほとんど同じである。つまりこのプロセスは人間と他の生物に共通する自然の現象的な事実である。そして私たちの高度に複雑な生活も、最も基礎的なレベルでは、こういう生物学的な事実根ざしていることは否定できない。この事実を離れ、あるいはこれを無視した現実の生活などというものはおよそ考えられないであろう。そのことは、端的に言って、食欲と性欲とがなければ、私たちの生存が成り立たないということからも明らかである。この二つの欲望は人間が生きるための最も基本的な要因であると同時に、それらは、それ自体としては、人間と他の動物に共通するものであり、人間が動物にほかならないことの証しであるとも言える。言い換えると、事実のレベルで考えるかぎり、人間は他の動物とはなんら異なるところがないと言ってよい。それにもかかわらず、実際には人間の生活と他の動物の生存とは明らかに大きく違っている。両者の間には質的(本質的)な差異があると言ってもさしつかえはないであろう。私たちはその差異を、例えば熱烈なクリスチャンのように、宗教的な権威によって正当化されたものと確信してはいなくても、また人間と動物との間に本質的な差異を認めることを拒否する進化論に対して、常識的な賛意と理解を抱く程度にすぎないとしても、私たちは自分の考えていることや行動の仕方を正直に反省してみれば、やはり人間が他の動物とは根本的に異なっていることを、*インプリシットにせよ、*エクस्पリシットにせよ、意識せざるをえないし、またその差異を多かれ少なかれ認めているはずである。それがいわば私たちの思考や行動、知識やモラルを支えている良識というものである。思うに、どんなに熱烈な進化論信奉者でも、他の動物に対する人間の独自性を暗に認めないということはあるであろう。

ではそのように人間を他の動物から区別する独自性とは何であろうか。もちろんこういう問いに対しては、直立二足歩行とか、火や言葉を使用するとか、技術を用いて労働するとか、さまざまな答えが与えられるであろう。これらの答えはそれぞれに正しいと言える。しかし、ここでは、人間の生き方は事実のレベルにとどまるものではないということをもって答えとしたい。つまり人間は単なる事実のレベルだけではなく、そのうえに別のレベルの生き方を持っているということである。

例えば人間の生涯の出発点である誕生について考えてみても、それはたしかに受胎・妊娠・出産という生理的な現象(つまり事実)を核心に持っていることは言うまでもない。しかし、私たち自身がよく知っているように、人間の誕生は明らかにそれだけのものにはとどまらない。既に受胎の事実が知らされたときから、本人はもとより周辺のひとびとの心に喜び・不安・期待・願望などの(場合によってはこれらとは反対のベクトルを持つ)情念が生起し、それに伴ってさまざまな個人的・社会的な行動が喚起されることによって、受胎という生理的な事実にはさまざまな意味づけがなされる。(その最も極端な例は、西欧の宗教画に頻繁に見られる「受胎告知」というテーマであろう。あれはもちろん聖母マリアがイエスという特別の人間をみごもったこ

とを主題としているが、それよりもむしろおよそ人間の受胎そのものを聖化していると考えられることもできる。) 同じような意味づけは、妊娠や出産に伴う情念やそれをめぐるもろもろの慣習や儀礼的行動などについても認められる。そしてこのような意味づけは人間の全生涯にわたって、またその生活のあらゆる面について行われている。つまり人間の生活のなかには、常に自然の現象的な事実とともに、それを超えた意味が働いている。したがって人間は、事実と意味の二つのレベルの両方にまたがって生きているわけであるが、事実とは要するに自然現象であり、人間が他の動物と原理的に共有するものである(もともと直立二足歩行にもとづく人間特有の生理学的な事実があることまで、ここで否定しようとするものではない)から、人間の生活をとくに人間的なものとしているのは意味にほかならないことになる。簡単に言えば、人間は意味によってこそ人間であるし、また人間となるのである。人間のあらゆる営みには意味がつきまといっている。

そのことは、例えば「食べる」という最も素朴で原初的な行動についても人間の食べ方と他の動物の食べ方がどれほど大きく違うかを考えてみれば明らかであろう。手指の使用ということも人間と動物を区別する重要な点であるが、それは直立二足歩行という人間に特有の生理学的な事実由来のものであって、そのこと自体は意味のレベルのものではないと言えるから、これは別にして、人間の摂食行動に必ず付随する食器・調理・作法などについて考えると、そのいずれをとってみても、そこには人間に独特の文化というものが見られるし、文化とはまさに意味の表現にほかならないのである。(高等類人猿の摂食行動にも一種の文化を認める学説もあるが、ここではそれに立ち入ることはしない。) こうして私たちの生活は、その深奥部にいたるまで意味によって浸透されていることがわかる。

私たちの生活の場面はさまざまな姿やあり方を持った空間であるが、私たちはその生活空間のなかでいつも何らかの仕方で物および人と関わって生きており、その関わりの中にも意味が働いている。というよりも、その関わりそのものが意味であるということが多いのである。

きわめて簡単な例について考えてみよう。いま私は書斎にいて原稿を書いている。その窓から隣の寺の木立が眺められる。また書斎のなかには机、椅子、書棚、書物、筆記用具、原稿用紙、インク壺つぼなどがある。ところで坐まゐっている私の向むかいに木立が見えるということは、その限りでは単なる事実かもしれない。しかし、私がそれを眺めながら、その枝に咲いた花を美しいと思ひ、その葉の緑に深い憩やすみいを覚えるとすれば、その木立と私との関わりはもはや事実のレベルのものではなくて、意味のレベルに移っている。すなわち私と木立との関わりは単なる位置関係や、それを見るところという認知関係に尽きるものではない。つまり事実関係を超越している。したがってこの関係を含む空間もはや事実空間ではなくて意味空間となっている。ましてや書斎のなかにあるさまざまな物は、私にとってただそこに在るといっただけではない。それらはすべて私が使用するもの、私にとって役に立つものであるが、さらにそこへ好悪の情念や価値判断や記憶・想像を伴うさまざまな想念が加わる。つまりひとつひとつが私にとって意味を持っている。そう考えれば、これらのものと私との関わりは意味以外の何ものでもないと言つてよい。あるいはいま執筆している私の周りにはいろんな音が響いている。現代の生活環境という空間には、物体だけではなく音響も充滿している。しかもこの音が私たちにとって純粹に物理的な音響でしかないということは、ほとんど考えられないであろう。ある音は耳に快く響くし、他の音は不快である。またある音は何かの信号であり、別の音は人間の言葉である。こうして私たちの周辺に流れる音響にも意味がこもっている。(個人的な経験であるが、敗戦後しばらくの間、列車の汽笛や自動車のクラクションがモールズ信号による言葉に聞こえたことがある。)物や音との関わりでさえこのように意味につきまといわれているのであるから、まして人との関わりの中だけでは、意味を持たないものは考えられないといつても

